



プラスアル  
ファ、  
マイナスベータ



takashiishimoto

自分が決めた休日に何も予定がなくて家にも居たくない時は、藤田は2年前から借りっぱなしにしてあるスタジオに行くことにしている。そのスタジオは自由が丘の駅から5分奥沢の住宅街に向かって歩いた2階建ての雑居ビルの2階にあって、人にこのスタジオのことを話す時は「第二創和」という雑居ビルの名前を使って話す。自分の頭の中では、レコーディングに幾つか使うスタジオの中で、単に「スタジオ」と呼んで他と区別している。音響処理は綿密に計算されている訳ではなく、直径1センチくらいの穴を天井にぼつぼつ空け、下をフローリングにして、サブとは透明なプラスチック板と木製の板を組み合わせた仕切りで分けてあるだけで、そのサブも8トラックのレコーダーが置かれている簡単なものだ。レコーディングルームには、音大入学前の春休みに買ったグランドピアノを置いている。藤田はここに来ると、レコーディングルームに自分で置いたソファに座って音楽を聴きながら雑誌か本を読むか、ピアノの練習をする。ピアノは取り立ててうまいという訳ではないが、練習はある程度するようにしているし好きではないが嫌いでもない。演奏する機会は年々減ってきているが、誰かと一緒に演奏する時に、相手に不快な思いをさせない最低限の水準は維持しなければいけないと思っている。ピアノの前に座ると、まずスカルラッティやモーツァルトを幾つか弾いた後、あらためてハノンを弾いて指慣らしをする。それからバッハ、ベートーベン、ドビュッシー、シェーンベルク、プロコフィエフらの昔よく練習した曲を弾いてから、次に今までのレパートリーにはない曲を練習する。昔はあまり弾かなかったシューマンやショパン、学生時代に友達から聴かされた20世紀の作曲家の作品、それに、好きな映画音楽やギル・エバンス、セロニアス・モンク、ビル・エバンスといったジャズの譜面を試してみることもある。いつもだいたい2時間くらい練習すると飽きてきて1回狭い階段を降りて外に出る。近所のコンビニで500ミリリットルのペットボトルに入った飲物を買ってから本屋に行ってファッション誌や画集や写真集を見たり、昼御飯を食べていない時はよく行くフランス料理の店か、中華料理の店か、蕎麦屋に行って食べる。それからまたスタジオに戻って、練習する気がある時はまた1時間から1時間半くらい練習して、ピアノで曲を作る気があればそこで作曲することもある。作曲をする時は五線譜とシャーペンをソファの前の雑誌や本が置いてある背の低いデスクから取ってきて、頭で浮かぶ音を指の動きに流されないように既存の曲の練習よりも厳密に弾いて確かめる。旋律を作ったり和音を組み合わせたりするのは遅いが、2～3分の小品であれば作曲を始めた時には成立の予感があるので、進み方はゆっくりでも行き詰まることはほとんどない。ただしそれ以上長いと1日で出来ることはないのでピアノではなく、他に借りているスタジオのコンピュータとキーボードで作る。作ろうとするものを客観化することが出来て集中するのが楽なので、ここ何年かは仕事で曲を作る時はピアノで弾く曲であってもコンピュータで作る方が多い。

南側の壁の上の方に沿って取り付けられた窓を通して入ってくる外の光は弱く、このスタジオに入ると閉じこめられたような気持ちになって、藤田にはそれが心地よく感じる。夕方になりライトを消して窓から入ってくる夕暮れの色をソファにもたれて見上げていると世の中の様々な微細な音まで分かる気がして、ベルクや、ブーレーズや武満が作った音楽のことが頭に浮かんだが、実際に演奏を聴くと思ったよりよく聴こえないのが分かっているため、この前、自分が作ったクラブミュージックをかけてみると案外風景にマッチして気分が良くなった。そんな風に1人で休日を過ごすクリーム色に塗られ、薄汚れ、ひび割れた線が何本か引かれているコンクリートの壁に囲まれた狭い階段をまた降りて駅に行き、東横線と日比谷線を乗り継ぎ、広尾で降りてマンションに帰る。

家に帰ると玄関からは一番奥の、2つの大きな本棚に収まりきれない本や雑誌の山が所々に積み残されている、デスクトップのパソコンを置いてある部屋にまず入り、パソコンの電源を立ち上げメールをチェックする。携帯電話の電源はほとんどオフにしてあるので仕事もプライベートの連絡もほとんどメールになる。付き合ってから1年経つ男からメールが来ていた。川上というこの男は服飾ブランドに勤めるパタンナーで、藤田はそのブランドのショーのために音楽を作ったこともある。デザイナーは若く、24、5才で川上達と一緒にたまたま藤田のいるクラブに来る。

川上は金をあまり持っていないので、食事はたいてい自分達で作ってどちらかの家で食べる。藤田のマンションは3LDKだが、ひとつは2台のパソコンと3台のキーボードやその他のコンピュータ機材で埋まっている仕事部屋で、キッチンの奥にあるもうひとつの部屋が本棚とパソコンを置いた机があるプライベートルームになっていて、あとはダブルベッドとクローゼットと化粧台と鏡の置かれた寝室と、グランドピアノとテレビゲームを接続したテレビ、オーディオセット、ソファ、テーブル、観葉植物、間接照明が置かれたリビングがあって、リビングにはバー付きのキッチンがつながっている。

川上の部屋は蒲田の駅から10分程歩いた住宅街の花屋の2階にあり、2部屋とも畳を敷いた和室になっている。この部屋は会社の同僚がその花屋と知り合いで、その同僚から紹介してもらった。蒲田からならオフィスがある品川まで通いやすいし、店の2階の和室ということで家賃はとても安い。花屋はもともと夫方の実家だが、父親は亡くなり母親は老人ホームに移っていて、今では30代の夫婦だけでやっている。川上の部屋にはその花屋から買った花や貰った花がそこに置かれ、ドライフラワーも壁にいくつか並べられている。その部屋からは電車の音や、たまに接客をしている花屋の夫婦の声が聞こえて、それが藤田を落ち着かせてくれるので晩御飯は川上の部屋の狭い台所で作って食べることが多い。それから部屋から5分程離れた駐車場まで歩き、川上の車で藤田のマンションに移って過ごす。

明日、「j. s.」行く？

会社の人達と行って、打合せすることになってんだけど、

その後、来るか行くかしない？メール入れといて。

フランス料理店で料理を注文する時と本屋でファッション雑誌を買う時以外口を開かなかったこともあって、藤田はメールを入れる前に川上に電話を入れてみた。電話は2回呼出音が鳴った後に相手が出た。

「あ、今日？」と携帯電話に表示された番号を見て川上が言うと、藤田は「メール見たよ、今日遅いの？」と聞いた。

「遅いと思う、まだオフィスなんだ。」「よかったら寄ってもいいよ。」「うん、けど今日は帰るわ。難しい段階なんだ。」「じゃあ明日会おう、私もお店行くから。」「

川上のうん、という返事を聞いてから藤田は電話を切って、パソコンのマウスをクリックして他のメールをチェックした。「j. s.」のオーナーの横田から「今度はいつ来るの？返事入れといて下さい。」と連絡があり、楽曲提供したことがある二十歳の女のタレントから自分のマンションでのパーティの誘いがあり、店で顔馴染みになったサッカー選手から世間話の後にこの前の試合の感想を聞かれ、川上の同僚から今度4人で旅行しようと言ってるんだと自分が知らなかった計画を明かされ、レコード会社の担当者から打ち合わせのスケジュールが送られていて、出版社の人間を介して知り合ったゲイの大学教師からこの前のCDの批評が来ていた。藤田はレコード会社に返事を出した後で横田の携帯に電話をかけた。横田の携帯電話は自分の店の中なら地下

にいても通じるように作り直されている。「藤田ですけど、」と言うと、すぐに「今日来る？」と言われた。「11時くらいに行きます。明日も行くけど。」「そう、じゃ待ってます、食事も用意する？」「食べてくからいいです。」横田が、分かりました、よろしく、と言って電話を切ると、藤田は冷蔵庫を開けてみた。明日のために作り置き出来るもの、シチューを作ろうと藤田は思った。

「j. s.」の隣の白塗り5階建てのビルは現在どこのテナントも入っていない。このビルと反対隣の空地、それに近所の神社の横にある3階建てのマンションも横田が4年前に、自分が7年間勤めていたアメリカの銀行から買ったものだ。その他にも代官山と広尾にいくつかの物件を所有しているが、その時使った20数億円の金は、祖父が創業者で、死んだ自分の父親に代わって製薬会社の社長を務める叔父に、自分の父がもともと所有していた株式を全て売り渡した分と、残りは叔父から子会社のPR会社の名目を持つトンネル会社を通して支払ってもらった分とで賄った。横田はこの時の叔父との約束で以後会社経営とは一切関わりを持たないことになり、銀行から買った不動産は全て、自分の母が生前設立した美術財団の所有ということにして、ある程度税制上の保護を受けられる手続きを行った。自分が小学校に上がる頃には両親は別居していて、中学生の頃にはいつか家を出て行くことに決めていたので、親戚との交わりを絶って、自分が勤めていた銀行から目当ての物件を買った時も予定通りだと感じていた。

横田も住んでいるマンションの駐車場に車を止めて、何度か角を曲がりながら、神社の横の竹藪や、辺りの住宅街に2、3ある洒落たレストランやバーの前を歩いていくと、80坪程の空地の手前に、5階建ての雑居ビルの、改築して広げた窓のある一面から、薄くオレンジがかった明かりが洩れているのが見えてくる。その手前には昔は印刷会社が入っていた同じくらいの高さの雑居ビルがあり、手前の曲がり角には「長谷川」と表札がかかった大きな一軒家が建っている。明かりが洩れているビルの正面には、滑り台とブランコと砂場とジャングルジムがある薄暗い小さな公園があり、入り口に立っている幼児の背の高さくらいの四角に切られた石に、古くひび割れ、「若葉児童公園」と書かれた文字も消えかかっている木の板が打ってある。2ヶ所だけ灯りに照らされたその公園の奥からはまた住宅地が続いている。エントランスは昔、地下駐車場へのスロープだった場所を利用して作られていて、まわりをコンクリートで埋めてわざと狭く作った階段を降りていくと、倉庫の入口のような、鉄製の人ひとり入れる普通のドアがある。ドアノブをまわして中に入り、奥の方が明るく見えるガランとしたトンネルのような空間を10メートル程歩いた後、また5段、古い建物の屋外にくっ付いているような鉄で出来た階段を上がると、プラスチックで出来た透明な自動ドアがある。自動ドアの内側にドアマンがいるのが入る前から見えていて、彼らは客が来ると1組1組席まで案内することになっている。「j. s.」では入口で客を見て入場を断りはしない。プラスチックの自動ドアは四角いビルの角にあり、その対角に切り開かれたガラス窓から、鏡と外に置かれた照明を使って隣の空き地の様子が見えるようになっていて、ガラス窓から入ってくるその光は、店内の照明と一緒に、手前の壁に架けられた、大きな贗作のベラスケスの絵を照らしだすように工夫されている。ガラス窓をまたいで、鉄と電光管で作られた「スベリダイ」と呼ばれている大きなオブジェが立っている。反対側に見える2階のフロアと同じくらいの高さがあり、左側に向かってカーブを描きながら脚を伸ばした電光管の中を、不規則の間隔で、ボーツとした色をつけられたマリモのような光や、水のような流れが上から様々な道筋を通過してゆっくり落ちていく。「スベリダイ」の後ろにまわると階段で下のフロアに行けるようになっていく。

この建物はニューヨークで働いている時に仕事を通じて知り合った、有名なオランダ人建築家に設計してもらった。5階建てのビルは殺風景な外観はほとんど残してその雰囲気を生かし、内部は地下1階から4階までに改築してある。カフェになっている1階の天井は高く、2階まで部分的に吹き抜けになっていて、映画やテレビの撮影スタジオにあるような鉄のレールに乗った照明装置を幾分シンプルにしたような機材で照らされている。2階はレストランになっていて、下のライブの様子を眺めながら食事出来るようになっていく。向こう側からは影になり、こちらからは透明に見える超硬化ガラスで作られた吹き抜け部分との仕切りは、食事をする客に軽い眩

量を誘うようなフロア自体の浮遊感を与えている。3階はカウンターとソファで簡素に作ったVIPルームで、4階は事務所とプライベートのゲストルームになっていて外には広いベランダもある。

入口の横に立っている中国人留学生のドアマンに入っすぐ、「横田さんは？」と藤田が聞くと、右手でこちらです、という風に行く方向を示してから、先に立って奥の方に歩き出した。大きなガラス窓への「スベリダイ」のアーチをくぐり後ろにまわって、オレンジ色に暗く照らされる階段をゆっくり降りていくと、1階のスピーカーから流れているものと同じ音楽が聞こえてくる。DJブースは階段の裏にあり踊っている客からは直接見えない配置になっていて、ブースの中のモニターに映る客の反応を見ながら通常2人で、1人は音を1人は映像をコントロールする。藤田は階段を降りると裏手にまわり、その日はブースの中に1人でいたパトリック・ライツハーに英語で挨拶した。パトリックはメジャーのレコード会社でエンジニアをやりながら自分でもインディペンデントの映画音楽を作っていて、横田がまだニューヨークにいた時に、たまに遊びに行っていたクラブで共通の友人に紹介されて知り合った。ヨハン・クルセンがデザインした店の音楽を作って欲しい、と銀行を辞める前に横田が頼み、「j. s.」での年間の契約料だけで今までの年収分を保証すると、パトリックは自分で転職の話をもとめて東京にやってきた。「(これいつ作ったの?)」「(ずっと前に作ったものを、昨日仕事の空き時間にスタジオで作り直して持ってきた。まだ未完成だけど。)」(和音はほとんど加工されてるのね。)」(ほんの少しだけ居心地が悪くなるようにしているんだ)」

藤田とパトリックが話していると横田がドアマンに連れられてやってきて、パトリックに、「(オペレーションがないならこっちでキョウコと一緒に飲もう。)」と言ってから、藤田にも英語で、「(1週間ぶりだね。)」と話しかけた。地下1階はオレンジ色の空間が所々青冷めた照明で照らされていて、大きいものでは横幅が4.5メートル、縦に2.5メートルくらいあるものから、28型くらいのもので、サイズがまちまちのモニターが10台程、床や壁に埋め込まれていて、コンピュータグラフィックスで作ったコラージュや、イラストレーターや漫画家が描き下ろした幾つかのカット、ヨーロッパ、ブラジル、アルゼンチンなどのサッカーリーグの試合の模様、日本人女優を使った短編映画、デジタル画像で映し出された14、5世紀から現代に至るまでの様々な絵画、日本人のお笑いコンビのコントの模様などがそれぞれに映し出され、各モニターを関係させながら流している。コーナーのバーカウンターではまだだいぶ若く見える2人の日本人のバーテンが酒を作っており、あと1人、台湾から留学してきた綺麗な女の子が中に入ってその2人の手伝いをしている。フロアの角にはスチール製のテーブルが台と台を重ねて2つずつ組にして幾つか積まれていて、客が増えると店員がそのテーブルを適当な場所に配置する。客はテーブルがないスペースで体を揺らして勝手に踊っていて、30人くらい居るように見えるそのフロアには、店員と横田と藤田以外の日本人はいないようだった。

横田の母が昔買った、本物のバスキアの絵の近くにテーブルを置いてもらい3人で座ると、横田はほとんど匂いをつけただけの薄いジントニック、パトリックはソルティードッグ、藤田はミモザを頼んだ。ボストンの音楽院の学生に協力してもらい、ニューヨークの2館だけで上映される映画のためにパトリックが作った弦楽4重奏は、一度シーケンサーに取り込んで音色やピッチの高低を加工した後、さらにピアノの音とシンセサイザーによる効果音を加えてスピードを上げたものに作り直されていて、12才の主人公の男の子が用意していた警棒で殴って喧嘩の相手を半殺しにした後に、1人で歩いてCDショップに行くまでの間に流れるト長調のワルツは、ユーモア、叙情性、悲惨さのようなものがさらに伝わりやすいように、意図してアレンジされているように聴こえる。映画のディレクターを藤田が聞くと、横田も知っている2人のアメリカ人の名

前をパトリックはすぐに答え、「（今も2人ともニューヨークにいて、1人は映像学校の教師をやっている、もう1人はカメラマンで、自分の専用スタジオを間借りして持っている。）」と言った。

パトリックがこの前ニューヨークに行った時に見た映画の話を聞いた後に、「j. s.」にいるDJの話になった。藤田もパトリックもDJではない。最近ではパトリックは少しやることもあるが、2人は楽曲提供、店に流れる音楽の選曲、他に楽曲提供をしてくれる人やDJやライブをするミュージシャンの人選をすることが契約内容になっている。

「j. s.」には2人のDJがいて、そのうちの1人はパトリックがニューヨークのクラブから2年前に連れてきた。ギャランティと、月に1回分のニューヨーク往復の飛行機代と、代官山の2DKのマンションと、パトリックが所属するレコード会社との契約を条件にして、月に10日は「j. s.」に来ていたが、もうニューヨークに帰ると言っているらしい。半年程前からこの話が出ていよいよ限界のようだ。パトリックが台の上のグラスに触りながら、「（いい加減に帰らないとみんなに忘れられると言ってる。）」と言った。横田が「（月に10日はニューヨークにいるけど、往復は無理があるのかな。）」と答えた時に、注文はしていなかったが、店員がチーズの盛り合わせを持ってきた。藤田はブルーチーズに手を伸ばし、クラッカーと一緒に口に入れながら、「（無理あるよね、ホーリーが月に10日はニューヨークに帰ってるってことは出来ればあっちにいたい、っていうことだから。）」と言って、細長い円錐形のグラスに口を付けてひと口飲んだ。横田が、「（チェザーレに聞いてみようかな。）」と言った。チェザーレの父親はクラシックの作品を主に出しているレコード会社の社長だが、本物のシシリアマフィアでもある。チェザーレは10代の頃からそこらじゅうの遊び場で大金を使っているので顔が広くて、頭もルックスもよく、金は使うが振る舞いは浮いていないため、イタリア系だがソーホーのクラブでも名は通っている。横田はニューヨーク時代、イタリアンレストランのオーナーからの紹介で知り合い、チェザーレが当時作ろうとしていたクラブの立地と資金調達の方法について簡単なアドバイスをしたのがきっかけで仲良くなった。

「（ニューヨークのクラブミュージックは最近おもしろくない。）」とパトリックが横田に言うと、藤田は、「（クラブは音楽聴くためのところじゃないしね。いいか悪いかは尺度の問題もあるし、）」と言って、またひと口ミモザを飲んでから、「（私なんかは自分が作ってなかったら行かないし。）」とグラスを見ながら話を続けた。「（チェザーレという人と、日野さんと、とりあえず森山さんに聞いてみたらどうですか？私はパトリックと松原君がいればいいと思うし、ダンスミュージックがない時はテーブルでフロアを埋めちゃえばいいと思うけど。）」と藤田が思っていることをストレートに横田に言うと、横田はジントニックを飲みながら、「それも考えよう。」と穏やかに答えた。

2時間キーボードの前に座って作った16小節のモチーフをシーケンサーに取り込んで、パソコンを操作して幾つかの音色を試し、修飾音を散りばめたものを数パターン作っている間、駒沢淑子は作業スペースからはやや離れた所にあるソファに座って、紙コップに注がれたコーヒーを飲みながら藤田の様子をぼんやり見ていた。昨日遅くに藤田に電話して、「明日今日子さんの家に行ってもいいですか？」と聞くと、明日は気分転換でスタジオに行く、家でも出来る作業だけどうちの椅子には座り飽きた、と言われたので藤田に頼んで自分もまたスタジオまで行くことにした。駒沢がこのスタジオに来たのは3度目なので勝手はだいたい分かっている。ディレクターの松谷、レコーディングエンジニアの向山とアシスタントの河合、コンピュータプログラマーの相藤、それに藤田を加えた5名で作業をしていて、おとなしく作業を見守っている合間に、松谷とはちょこちょここと話すようになった。

自分が初出演した映画の中の、少年合唱団が歌ったりリカルな挿入曲に涙を流して感動して、その音楽を作った藤田に試写が終わった後すぐ、仕事場を見学させてくれるよう熱心に頼んで、駒沢は初めてスタジオに行った。同年代の友達というより年上の、自分にはないノウハウを持っている人という方がラクだし楽しいので、それ以来ちよくちよく藤田と会うようになった。「j.s.」にも何度か来たことがある。

藤田が作業に疲れてソファに座り、ポットから自分でコーヒーを注いでひと口飲むと、駒沢に、「今日は昨日よりはまし。」と言った。もうひと口コーヒーをすすると、テーブルの上にあるガムを1粒取って口に入れて噛んだ。駒沢は、「いつリリースされるんですか？」と藤田に聞いた。

「1月14日。1月の2週目の金曜日ね、何に合わせたる訳じゃないんだけど。」

「あと3カ月くらいですね、私は二十歳（はたち）になってるな。」

藤田と駒沢と松谷のいるソファセットと反対側の角には、不精髭を生やした20代半ばの相藤が、パソコンの映像製作ソフトを使って作ったコンピュータグラフィックスを38インチの大型モニターに映し出して遊んでいて、その様子を他の仕事が混ざって寝不足続きの向山がソファに身を預けて眺めている。河合は年の近い相藤の近くに自分の椅子を持ってきて座り、キーボードを叩く手元を見ながらあれこれ聞いている。松谷がバッハのフランス組曲を部屋に流してから、藤田と駒沢が座っているソファとは机を挟んだ向かいの椅子に座った。

「駒沢さんは今日は学校休みなの？」と松谷が駒沢に聞いた。

「今日も自主的に休みました。」

「つままないんでしょ。」と藤田が駒沢に言うと、駒沢は笑いながら、うん、と言った。

藤田はガムを噛んだまま、駒沢をよけてちょっと立ち、うーんと伸びをしてから小型のキーボードを作業途中の机からジャックを引き抜いて持ってきて、こちらの机の上に置き、コードをこちら側のコーナーに置かれた機材にまたつないだ。それから音色を、アコーディオンの音のようにも人の声のようにも聞こえる微妙な震えのある音色に近づけてから、駒沢に、「このボリュームを、らしくなるようにいじってみて。」とつまみを指差してそこを右手で持たせた。「まず練習。」と藤田は左手だけで幾つかの和音や旋律をゆっくり弾いて、後ろでかかっているピアノの曲の伴奏をした。最初のうち藤田も一緒につまみを持って、蛇腹を広げたり閉じたりしている雰囲気を出すコツを探っていたが、途中から駒沢だけに任せた。藤田の弾く和音や旋律は、小さな音でグールドのピアノと近付いたり、遠く離れたりしながら、短い曲のひとつずつにくっついていき、音色も変えられて、錆びたような感じになったり、電子音に近付いたりいろいろと試された。パーティータの序曲が始まるとキーボードの音量をやや上げて、調に沿ったり離れたりしながら両手で伴奏を付けていて、途中でつまみを離そうとした駒沢に、続けて、と言った。こ



まめにつまみを動かさなければ1音1音をそれぞれに不安定なままにしておくことは出来ない。駒沢は小学校3年生の時に弾かされたアコーディオンの音を思い出しながら自分なりにやってみた。「音の出だしは弱めで、それからそっちで音量をコントロールするのよ。」「そこでちょっと揺らして。」といった藤田のアドバイスを聞きながら、ピアノの音とキーボードが作る音に耳を澄ましてつまみを動かしていると、最後には藤田も何も言わず演奏をしていて、やがて10分くらいの曲が終わった。そこで藤田は弾くのをやめて、「バッハにもグールドにも聴かせられない、遊びだけど。」と笑いながら駒沢に言った。駒沢は、ほら、と言って右手の掌ににじんだ汗を藤田と松谷に見せた。松谷は駒沢の掌を見て、すごいな、と言いながらキーボードを手元に引き寄せて、つまみをいじってバンドネオンの音を出してから、8小節の主題を大袈裟に弾いて、「アストル・ピアソラ。」と下を向いて笑いながら2人に言った。それから藤田は唐突に、「私はあと1カ月で29才よ。」と駒沢と松谷に言った。松谷は「二十歳を超えると人の中身は年齢じゃ測れなくなるよね。」と控えめに自分の意見を表明した。

「駒子と同じで二十歳のころはもう働いてたな。大学卒業してからだと就職するのはもう遅いのよ、就職口はないんだから。だからスタジオ籠もって1日ですごいたくさんの、テレビやビデオで使う効果音を作ったりとか、ピアノやシンセ弾いたり、エンジニアのアシスタントみたいなことやったりして、レコーディングの手伝いとかをした。NHKの仕事なんかだいぶやった、『おかあさんといっしょ』のレコーディングとか、幼児番組で着ぐるみの動物が歌う歌の作曲とかね。」

「作曲はその頃からやってたんですか？」と駒沢は藤田に聞いた。

「一番最初は9才とか10才くらいの時かな。その頃は全部真似だけど、例えば2声とか3声できさきみたいにバッハの真似したり、ブラームスの弦楽重奏曲があってそれが気に入ったら調性も同じにして雰囲気そっくりなものを作ってみたりして。それでしばらくするともう飽きて、高校でキーボードをいじるようになるまで何も作らなかった。」

「高校の時は、そういう作ったものはどこかで演奏するんですか？」

「普通に、学園祭とか。その頃はまだテクノ、っていう言葉があって、シンセサイザーの音がしないと学園祭じゃ人気出ないもんだから、学校のヤマハのシンセサイザー取り合いになったり、お金持ちの家の子に買ってもらったりして、らしくなるようにやってたな。」

「私は高校時代にはすでに退屈してました。」と駒沢は言って下を向いてちょっと照れ笑いのようなものを浮かべた。肩まで伸ばしウェーブを付けた髪が両側から顔にかかって表情が見えなくなり、ほんの一瞬動きが止まった。それから、「いろいろなことを知りたいんです。語学も、音楽も、映画も。本も読みたいし。」と、机の白い地肌を見つめながら落ち着いた様子で話した。藤田は、またキーボードを自分の方に持ってきて和音を短く弾きながら、「私も。」と言った。

「駒子はいつから働いてるんだっけ？」と藤田が駒沢に聞いた。

「高校を卒業して大学に入る前の春休みに映画のオーディション受けたんです。友達もいなくて退屈してたし。背高い子探してたみたいでトントン拍子に行って、それからです。」

「仕事はうまくいってるの？」

「あの映画から仕事ないんですよ。まわりがうるさくなるから、テレビには出ないことにしてるし。だから今度は冬休み中の舞台です。初めてだから今から緊張してます。」

「大学は2年生なんだっけ。」

「はい。来年は留学生向けの講座も取って友達を増やそうと思うんです。大学であまり話す人いないから留学生なら相手にしてくれるかな、って思って。」

「私もそういう講座なら出てみたいな、今度大学連れてってよ。そういう所しばらく行ってな

いし。」

「今日子さんにそうされると大学っていい所に聞こえるんだけどな。」と、駒沢は笑顔を見せながら言って、自分の紙カップにポットからコーヒーを注ぎ足した。

川上は自分と同じパタンナーの服部、デザイナーの橘、アシスタントデザイナーの佐川と大河内と一緒に、「j. s.」へ11時半頃やって来た。横田は地下1階のDJブースの近くの、フロアの方からは幾分死角になっている場所に、大きめの長方形の机をセットして彼らを待っていた。机の上はブルーのシェードを被せた卓上ライトで柔らかく照らされている。眼鏡をかけて短髪の橘が横田とホーリーと藤田に挨拶してから席に着くと、その横に佐川、橘の正面に服部、その横に川上と大河内が座った。横田が飲物の注文を聞いてから、4人の中で一番年長の佐川に、「何かあったら言って下さい。」と言って向こうへ歩き出すのを待って、濃紺のシルク地で出来たシャツの襟を丸首の物が良さそうなセーターの外に出して、髪を刈り込んでオールバックに撫でつけたまだ二十歳過ぎくらいの店員が、特にメニューなどは出さずに「何か他にお持ちしましょうか?」と言った。そこにブースから藤田も出てきて、佐川と橘に、「みんな御飯食べて来たの?上から何が持って来れるか聞いてみますか?」と聞いた。橘が、「今からだと何が作れますか?」と店員に聞くと、店員は、「暫くお待ち下さい。」と言い残して奥の方に引っ込んだ。しばらくすると髪を立たせてシャツにジャケット姿のバーテンと、ショートヘアの綺麗な女の子が2人で、ミネラルウォーターが入った水差しと、色の違うショートカクテルが2つ、ウイスキーのオンザロックにチェイサー、グラスシャンパンとレモンスライスが入ったジン・フィズを持って来てそれぞれを机の上に置いた。

佐川の横に立ったまま、藤田が、「今日は秋冬の打ち合わせ?」と佐川と橘に聞くと、橘は、グラスをちょっと持ち上げて、いただきます、と言ってブランデー・サワーを1口舐めてから、「はい、パリの人の店に置かせてもらってる僕の服がそこそこ売れてるらしくて、じゃ自分の店作ろうかなっていうことと、ショーもそっちに移そうかなと。今日はもうほとんど決まってるんだけどやり方を確認しようと思って。」と藤田の方に首を向けながら言った。藤田は川上から何度か出ているその話に、うまくいくといいね、とだけ橘に返事をして、川上の後ろにまわり川上に、上にいるね、と言ってから、服部の肩に一瞬手を置き、「後でまた来ます。」とみんなに挨拶をしてエレベーターの方へ歩いていった。藤田と入れ替わりでさっき料理を聞きにいった店員がメモだけ持って戻ってきて幾つかの料理を言うと、佐川と橘が中心になって注文を決め、その後服部が「あと煮物。」と付け加えた。主に夜中から増えてくる日本人客向けの、野菜や魚や肉の醤油やミリンを使った和風の煮物のうち外国人にも好評のものは、小さい手持ちの黒板に書かれた英語のメニューにも、「t e b a」や「n i c k - j u g a」と書かれ載っている。

橘のデザインした洋服は、代官山、大阪心斎橋の直営店、神宮前と札幌のセレクトショップ、それに渋谷と福岡のデパート内の店で買うことができ、ブランド設立からこの次の3月で丸3年だが、年間の売上げは3億円強ある。一時のブームになっているブランドは別として、レディースの老舗の国内ブランドでも1ブランドの年間売上げは4、5億円であることを考えると小さい数字ではないし、ブランドの今後についてももう一度考え直すべきポイントに来ていることも示している。手を広げすぎないこと、多くの制約がある契約をしないこと、将来は海外で発表の場を持つことという橘の考え方に乗っ取って、レディースのみを作り社員数は8人、大規模の店舗展開は出来るが、売上げ目標と商品ラインナップの設定が付いてくる大手アパレルメーカーとの契約も断っており、海外進出については足掛かりとして、設立者からブランドネームを引き継ぎ、パリコレクションに発表の場を移している山口康一というデザイナーから紹介を受け、高級ブティック街の外れの、博物館を囲んでいる大きな公園のすぐそばにある「フルール・ド・セル」という主にイタリアから輸入された洋服を売っている店に、橘の洋服も去年の1月から置いてもらっている。「フルール・ド・セル」の28才のオーナー、ロベールは、山口のスタッフが持ってきた橘の洋服を初めて見た時に、洋服の仕組みを正確に把握している造形の確かさと、おそらく幼

い頃から絵画で学んだのであろう的確で緊張感があり、かつカラフルな色使いから、プロダクトデザインか何かの本職を別に持っている、ある程度年齢を重ねた人物が作った洋服だろうと判断した。衝撃は感じないが、鮮やかな色彩と端正なフォルムがあり、ブームや安易なモチーフではなく、ミリ単位のカットイングと研ぎ澄まされた色使い、色合わせによって緊張感を生み出そうとしている。ロベールが山口と会って初めて橘の服の話をした時は、まだ山口も橘と会ったことはなく、山口のメインスタッフの1人が橘と一緒に働いている人物と友人で、その関係で橘の作った洋服を見せられて、海外で売ってくれる店のあてはないか聞かれたのだ、と言っていた。その時に、橘がデザイン学校は卒業したが、まだ美術大学に通っている22才の学生であることを知って、ロベールは橘に興味を持ち、その1年半後、橘と3度目に会った時に自分の店で橘の服を扱う契約を結んだ。

パリのプレタポルテ協会に所属している有力デザイナーからの推薦があれば、決められた期間内に行われるバイヤー向けのショーの総称であるパリコレに参加することが出来るが、参加ブランドが飽和状態にある現在では会場確保もままならない。今回のパリコレ参加の話は、ロベールとフランスのファッション誌の若手エディターの協力と山口康一の口添えで進んだ。

「それで、今度の秋冬から、ショーはパリでやろうと思うんだ。会場はロベールの店から10分くらい歩いた所にあるフレンチレストランで結構広いよ。何本か太くて四角い柱が所々立ってるんだけど、僕が通った高校の体育館、半分くらいのスペースはあるんじゃないかな。内装は、なんとなかっていうフィンランド人がデザインした青とか緑とかクリーム色の四角っぽいパターンでだいたい壁を被ってあるんだけど、そこから今架かっている絵やリトグラフは取り払って、横田さんからジャクソン・ポロック2点とウィリアム・ブレイクの挿絵を幾つか借りて、ポロックの絵はウオーキングスペースのターンする先の壁に飾って、モデルが出てくる方に座ってる人がモデルの背中を目で追うと、その絵が目に入るようする。ウィリアム・ブレイクの絵は所々の柱を飾るんだ。舞台セットは組まない代わりに椅子と椅子の配置はよく考えて、椅子は昔親父がデザインしたやつをもう一度工場で作ってもらおうつもり。モデルは会場を斜めに歩く。袖から4、5メートル、そこで60度ターン、四角い柱の間をそのまま25メートルは歩いてもらってそこでターン、みたいな感じでね。上下で最低でも70点は作るよ。全部商品にするけど、ショーは50点くらいに絞るかもしれない。シューズは往寺さんのもの。メイクは100%『Le Confins』のエディターのコーディネイトに任せる。音楽も藤田さんに全部おまかせ。

『ファッション・スタイル』のパリ支局の人2人が通訳をやってくれる。これで経費内でいけるらしいよ。」

橘はそこで息を継いだ。川上は佐川か服部が言葉を継ぐだろうと思ったが、服部はウイスキーのオンザロックを口に運んで、誰かが喋るのを待っている。橘の言葉はいつも決定を意味するので川上にも特に質問はなかった。パリに行くんだな、と思った。

「私も勉強するから、川上君もフランス語勉強しといてね。」佐川が川上に笑いながら話しかけると、大河内が、「橘はこの前で5回目でしょ、佐川さんと服部さんは前の会社で結構行ってるんじゃないですか？」と質問をした。服部は、「俺、買物したり食事したりは出来るよ、パーティは無理だけど。」と鼻の下の髭をさすって返事をしながら、君はどうなんだっけ？という風に佐川の顔を見ると、佐川は、「英語よりは出来るわよ、ある程度必要だったから。指示は出来るんだけど、私も会話がなー。」と言ってオリーヴが入ったドライ・マティーニを一口飲んだ。佐川は一杯だけ飲んで、あとは普通ミネラルウォーターを飲む。「いつかみんなパリに住むんですかね？」と川上が言うと、「川上さんは藤田さんとよく相談して。」と橘が笑いながら答えた。

4階のゲストルームの黄がかったベージュに染めたレザーのソファに座って、藤田は店にたま

に来る知り合いのサッカー選手が出たこの前の試合のビデオを見ながらウオッカトニックを飲んでいたが、試合が退屈だったことと昼間の仕事疲れが出てうとうとしていた。エレベーターが4階に着いたことを知らせる、くぐもった電子音が扉越しに聞こえてもボーっとしたままで、川上がノックをしながら、「入るよ。」と言った時にも寝惚けながら、伸びと一緒にうーんと返事するのが精一杯だった。鉄製の重い扉が開くと川上と一緒に橘も立っていて、「お休みの所。」と言いながら川上の後ろから入ってきた。藤田はもう一回大きく伸びをしてから、「いつもお世話になってます。」と言ってから、何か自分に話があるのだろうと思って、「どうぞ座って。」と付け加えた。橘は、だいぶ忙しそうですね、あ、これこの前の試合ですね、僕テレビで見ました、と黒曜石の床の上を川上と一緒に7、8メートル歩きながら喋り、「あの、起こしちゃってすいません。」と言いながら、奥の方にひとつの辺があって、角に丸みを付けながら藤田の対面を占めている、くすんだ臙脂色のL字型のソファのちょうど藤田の向かいに座った。川上がその横に座って藤田に、「起きた？」と聞き、藤田がそれに頷くと、橘は寝惚けてうつむき加減の藤田の頭を見ながら、「ようやく全部話がまとまって、後は僕がデザインしてみんなで作ればいいことになったんだけど、正式には事務所をお願いするとして、パリのコレクションの時の音楽をまた藤田さんをお願いしたいんです。この前の僕、すごいよかったと思うし。いかがでしょう？」と笑顔を作りながら打診した。川上は橘から何も言われてなかったもので、パリコレの時の音楽についてはこの日まで藤田に何も言ってなかった。藤田が、「全部がオリジナルじゃなくていい？」と、ライムのスライスが入った目の前のウオッカトニックを眺めながら、以外とはっきりした声で尋ねると、橘は、「全部おまかせです。」と言った。「じゃ、分かりました、プラン聞いってから、最低選曲とアレンジは私がやらせて頂きます。」と藤田が顔を上げて明瞭に答えると、「俺もさっき聞いたんだ。」と、川上が言った。

「正直、昨日まで音楽に頭まわってなかったの、無くても出来るしさ。けど仮に音が無い状態を利用するにしても、そういうことも含めて一緒にやってもらう方が安心だし。何しろこっちは居場所確保しに行くんだから全力で行かないと。だから藤田さんをお願いしたんです。」

「橘君は頭いいからね。向こうでもうまくいくといいね。」

「もうミーティングは終わりです、みんな下で勝手に飲んでますから。じゃ僕も下に行って来ます、お休みなさい。」

橘は、よいしょと言いながら立ち上がって、川上の肩を1度、ポンと叩いて部屋を出ていった。「イヴ・サンローランみたい。」と藤田は言った。川上は、藤田のその言葉は橘のビジネスセンスを指しているんだろうと思った。

\*

(明け方のマンションの一室で、パソコンを使ってキーを打っている20代後半の男がいる。ポロシャツにスウェットパンツ姿で、後ろに撫でつけた髪を整髪料は落としていない。カーテンの脇から薄明かりが洩れ、鳥の鳴き声が聞こえる。部屋の明かりとパソコンが置かれた机のライトはついている。

机の上には、電話会社からの領収書、封筒に入った会社の健康診断の結果通知、数冊詰まれた本の一番上は漱石の書簡集が表を伏せて積んであり、ビタミン剤、風邪薬、手帳などがある秩序は維持しながら散らばっている。

厚手の、国際政治関連の本、哲学書、洋書、小説などがぎっしりと詰まった大きい本棚がふたつ、ベッドのまわりにも本が幾つかの山となって積まれ、大きなCDラックにはクラシック、ジャズ、ポップスなどジャンルは問わず様々なものが入られ、小型だが高性能のコンポが部屋の片隅に置かれている。

コンポのパワーランプはオンになっていてライトはついているが音楽は流れていない。)

(パソコンの画面上に次の文章が打ち出されていく様子が映される。)

例えば、道義的に考えるともう少し時間を置いた方がいいと思われる、事件や事故の被害者に取材をすることが求められた場合、自分の心の中に、取材を実行するための理由付けが必要な人とそうでない人というように、記者をふたつのタイプに分けて考えることが出来るかもしれない。もちろん、同一人物でもケースによって考えることが違うことはあるけれど、ひとりひとりの傾向はあるだろう。自己懐疑的な記者とそうでない記者、身なりに無頓着な記者とお洒落な記者、善人と悪人、健康な人と不健康な人、能力のある人とない人。

人の固まりをこんな風にふたつのタイプに分けて考えてしまう時は自分自身が弱っている時かもしれない。

記者が向いていないのか、集団活動である新聞記者が向いていないのか。

(物語はシンプルなものだ。会社に長期休暇を取って、主人公と、主人公が勤める新聞社にアルバイトに来ている恋人が2週間の海外旅行に行き結婚を決める。ミラノ、トリノ、ローマ、パリ、ブリュッセル、ニューヨークをまわって日本に帰ってくる間の出来事や会話、発見が物語の軸となるが、観客が退屈しないようにそれぞれの都市の特徴がエピソードとともに描き出されている。)

- ・ 主人公が旅行の話を切り出す時の2人の話。旅行の話をする前に、主人公は自分がなぜ記者になろうと思ったかを話す。  
「高校の時にはサッカーのことで女の子のことくらいしか考えてなかった。けど高3になって受験勉強始めた時は、将来は記者になりたい、ってなんとなく考えてたからやっぱり親父の影響かな。そうだな、あとやっぱりいろんな所に行ってみたかった。海外とかアブないところか有名人のとことか。単純。」  
恋人はアルバイトをやめる。
- ・ ミラノ空港からホテルへ。早速買い物。主人公は父親も新聞記者で比較的裕福な家庭に育った

こともあり、洋服の趣味はいい。恋人もグラフィックデザイナーの父親から美術センスを引き継いでいる。ただしスノブでない。趣味がよくて流行にもある程度気を使うアッパーミドルという感じ。ブティックの店員が英語を喋れたので店員としばらく洋服の話。翌日は美術館と読書とレストラン、夜は恋人が人づてに聞いていたクラブへ。

- ・ トリノでサッカー観戦。中田英寿がいるユベントスと、松田直樹が入団し即レギュラーをつかんだフィオレンティーナの試合。スポーツライターの知人と食事。その知人に連れていってもらったワインバーで酌配。
- ・ ローマは国内外の観光客でどこも混んでいて、その喧騒で2人とも不機嫌になるが、パリに行って、カフェで1人、楽々と食事をしている女性達を見ていると元気になった。最盛期を迎えた加藤望が活躍するパリ・サンジェルマンがUEFAカップを戦う試合を観戦。サッカー場では自分が所属する階級がどこなのかがはっきりと分かる。そのことに初めて気付いた恋人は、加藤望が得点を挙げたのを見て涙を流した。
- ・ ブリュッセルではEU本部、ニューヨークではグッゲンハイム美術館を見学。その後クラブのようなパブのような所で、若いドイツ人とイギリス人と日本人アーティストが演奏する、計算されたノイズがポップボーカルと一緒になったようなものを聴いた。雪がじゃんじゃん降りやたら寒い。ニューヨークでは少し退屈していた。
- ・ 日本に帰って来ると主人公は広告部に異動する。主人公は小説を書いてみることにする。企業、学校内でのいじめ、排除の仕方をひとつの題材に考えている。  
日本に帰ってきて2週間後、休みの日にスーパーで買い物した帰りに主人公がプロポーズをする。ちょうど通りすがりの犬に吠えられて、「私もあの子(チワワ)と同じ意見よ。」と恋人は笑いながら答えて、スーパーの袋から長葱を取り出す。それをブンブン振りながら歩き出した後、返事をしようとしてこちら側を振り返った所で、END。

\*

自宅のソファに座ってホロビッツが演奏するスカルラッチェのピアノソナタを聴きながら、VHSビデオに落とされたラッシュを見てみると、音楽はこれでいいんじゃないかと藤田は思った。おそらく音楽的であれば何でもいいということなのだろう。それほどカット、カットの映像の密度は高いと感じた。

自分の仕事に疑問を感じた主人公が恋人と一緒に海外旅行に行き、気分を一新して帰ってくる。それだけのストーリーだし大事件が起こる訳でもないが、場面ごとの状況設定も会話もちよっとしたエピソードも自然だし、照明には綿密に気が配られていて、セットや登場人物の服装やロケーションが工夫され、画面の配色は綺麗で効果的だった。

今年で30才になる女優とその友人の女性フォトグラファーが、友人関係やコネを使って資金繰りの目鼻を付け、キャスティングを進め、監督も務めていて、女優の知人である藤田に音楽が依頼された。ギャラは高くなかったが、フォトグラファーの名前が幾分人に知られているニューヨークでも単館で上映することが最初から決まっていたので、藤田は依頼を受けることにした。アメリカ人はほとんど見ないだろうが、ニューヨークに住む日本人が見て自分の音楽を気に入ってくれば、いつかそれが役に立つこともあるかもしれないと考えたのだ。

知人からのリクエストは何もなかった。ただ一度会って、いいものを作って下さい、と言われてただけだ。曲数も分量も任せられたのは、自分達がこれから作る映像に自信があったからかもしれない。ラッシュを初めて見終わった時には、藤田はオープニングはピアノの曲、エンディングはその曲をモチーフにして女性ボーカルを入れたものにしよう決めていた。今にも作れそうだったが、今日はラッシュをあと2、3回見ることにして、頭を冷やして明日から作ることにした。



作業していたレコーディングスタジオから調律士にそのままついて来てもらってピアノを調律してもらっている間に、隣で何度も繰り返し弾かれる音階も気にせず藤田はソファに座ってスラスラと譜面を書いた。1時間の間に60小節程度の曲が2曲出来た。調律士にお礼を言って送り出してから、さらに1時間の間にもう2曲出来た。それから最初の2曲に手を入れ、そのうちの1曲にはさらに16小節付け足した。そこで藤田は1回外に出て、コンビニでペットボトルに入ったミネラルウォーターとチョコレートを買って、本屋を立ち読みしつつうろうろした後にファッション雑誌を2冊買ってからまたスタジオに戻ってきた。その間まわりの風景はほとんど目に入らなかった。天気も分からないし人の顔も分からない。ただセーター1枚だけだと寒いと感じた。

シャーペンと消しゴムとサラの五線譜、それにさっき自分が書いた最初の2曲の譜面を持ってピアノの前に座る。もう1度立って椅子の高さを調節して座りなおすとすぐ最初の曲を弾き始めた。単純に音楽であること、つまり旋律、和音、リズムの効果がよく考えられていて、旋律がリリカルにもドラマティックにも傾きすぎず、ピアノの練習曲っぽいものになるよう心がけて作られたその曲は、小学生の頃自分自身が作った曲のようだった。悪くない。この曲はもう手を加えずにこのまま使える。タイトルを入れる所に、とりあえず「ハ長調練習曲（最初の夕食）」と書いておいた。

次の曲は誰かがどこかで、くすんだ（くすみ加減はピアノが決める。）金色の旋律と言っていたト長調で書かれていたが、台に立ててある五線譜に腰を浮かせて、「右の物を左へ、左の物を右へ（t h e m e）」とタイトルを書き入れてから弾き出した。交響曲のように響く主題、平行調へ移調して展開し、再び主題の変奏から最後のコーラルが導き出されていく。（スタッフロールの所で流す方は、最後のコーラルを、音感のよい30才くらいの素人、知人の女優は声が今ひとつつなので、もしかしたら一緒に監督をしている写真家とか、あるいは佐川さんでもいいかもしれない、コーラルだけど1人で歌ってもらう、日本語の詞を久保山さんか、映画の脚本家か監督に付けてもらうことにして、）

和音が響きあうピアノという楽器の特色を意識して作られた、ソナタの第一楽章のようなその曲は、シンプルに響き弾き手にも心地よく感じられる。この曲は終結部のパターンをさらに2、3個作って合わせて取っておくことにした。

73分の本編中、音楽や効果音が必要なシーンはおそらく30分程度だろうと藤田は考えた。最初と最後、場面のつなぎ、食事のシーン、映画の作り手が音楽が入ることを想定して作った出演者達が会話をするシーンくらいで、ごまかすために音楽を入れる部分は全くないし、逆に下手なものを入れると邪魔になる。例えばサンプラーを使って電子的なアレンジをする時も注意してやらないとかえって場面を損なうことになると思い、だから最初に流れるテーマはピアノ曲にした。藤田は他の2曲に少しづつ手を入れ3、40分でそれが終わった時、この調子だと1週間程度でおおよその作業は終わるだろうと思った。

家に帰ると川上が来て、キッチンでトマトの pastaソースとハンバーグを作る下拵えをしていた。結構大きいボリュームでシューマンのマンフレッド序曲がかかっている。藤田が何かの拍子にシューマンを聴かせた時、川上はフルトヴェングラーとベルリンフィルをセットにして取り付かれてしまった。藤田の家にあるシューマンのオーケストラはこれだけで、ピアノ曲やピアノ五重奏なども聴いてみたがあまり気に入らず、普段はクラシックをほとんど聴かないのに、自分でシューマンのピアノ協奏曲やフルトヴェングラーのベートーベンなども買ってみた。しかし最初に聴いた、戦後録音された、交響曲の4番とマンフレッド序曲がセットで入っているCDがやはり一番気に入っているようで、一時はほとんどこればかり聴いていた。藤田は飽きていたが、「耐えて。」と川上からお願いされたので我慢していたが、折りを見てほかのものが気に入るようにベートーベンや、リヒャルト・シュトラウスなどを聴かせている効果が、最近になって意図しない形で徐々に出てきたようで、本人はどうやらオーケストラ一般に飽きてきた様子だ。

「いろいろ作ってくれてるんだね。」

「後はサラダを作って缶詰のコンソメスープを温めればいいでしょ。」

「今日はだいぶ早いじゃない。」

「橘君が行き詰まってるんだよ。あともうちよいなんだけどね。佐川さんと服部さんはまだ事務所にいるけど、俺がいても邪魔になるから帰ってきた。」

「年明けて割とすぐなんだよね。」

「そう、だから猛烈に忙しいんだけど、スタッフは天才だらけだからまわってるよ。」

藤田は川上がハンバーグを焼く横で、レタスを洗いながら適当な大きさにちぎってテーブルの上のふたつの皿にのせている。「今日泊まっていくでしょ。」と言って適温に調節されたワインクーラーから赤ワインを出して、デキャンタとふたつのグラスの横に置いた。

「今日もスタジオ？」と川上は分かりきっていることを藤田に聞いた。

「今日はスタジオふたつ掛け持ちだったのよ。1個は難航していて1個はすぐ終わりそう。どっちがいいのかは分からないけど。」

「メールに書いてた映画どうだった？」

「後で見る？結構面白かったよ。小島啓は写真撮ってるから分かるけど、須藤さんも絵心あるのかな、ふたりでどうやって仕事割り振ってるのかは知らないけど。」

サラダにドレッシングをかけてしまい、タイミングよく焼けたハンバーグと温め終わったスープを机に並べてしまうと、スパゲッティを茹でるのは後にして食べ始めることにした。

川上がワインのコルクを引き抜いて藤田がそれをデキャンタに移す。きれいに移し終わるのを眺めていた川上がグラスに注ぐと、ふたりとも席につき乾杯をした。川上が今日会社で起こった事を端から話していく。ふたりが他の人と一緒にいる時は饒舌ではないが、ふたりきりの時は川上は自分の身の回りの出来事をよく喋る。藤田はふんふん聞いているが川上がそんなに話し下手ではないので割合おもしろく聞ける。デザインのアイデアを出すための気分転換に、橘は今日、共同の作業場と自分の個室を20往復くらいしたらしい。ただ午後からは自分の部屋から出てくるときに、スタッフへの注文やら独り言が増えてきたのでまだしっかりとした形になってはなないがだいぶペースは上がってきたようだ。昼休みには、川上のひとつ年上の広報担当のスタッフと、藤田を入れて4人で行こうと前から話している旅行の行き先の相談をして、仕事でも行くけどやっぱりパリにしようと思っっているけどどう？と藤田に聞き、それから何人か気になるデザイナーの洋服の話をした。

「今度気分転換に買物行こうよ。俺、最近全然洋服買ってないし。」「あたしも。」「忙しいんだよな。同じ仕事、嫌な人達と一緒にやってたらもう死んでるね。」「あたしは勝手に出来るか

らな一。曲が作れなくなったら引退して超下手なピアニストになって、外国の変てこなパブとかで演奏すればいいし。」「変てこなパブってどういうんだよ。」「ピアノの下手さ加減をごまかしてくれる特徴があるっていうことよね。」「けど、21世紀も半ばを過ぎればピアニストなんか激減するんじゃない？それとも増えるのかな？」「日本人の子供で楽器を演奏する子の数は減ってきてるわね。他にやることは多いし、結局楽器って難しいものだし。けどおもしろくって習得が難しいものがコストがかからない遊びでしょ。だからこれから本格的な経済成長を迎えようっていう国で、比較的精神的な余裕がありそうな国、えーとどこだ、そんなところある？台湾？北アフリカの方？伝統楽器だけじゃなくてインドなんかは優秀な演奏家って多いと思ったよ。どこも戦争とか内紛とかありそうな気もするけど。」「ふーん。」川上はハンバーグを切って頬張りワインをひと口飲んだ。牛肉の挽肉にちょうどミディアムで火が入っている。藤田はレタスとアスパラをフォークと一緒に刺して口に運んだ。明日スーパーで買物しとかなきゃ、と思った。

「ねえ。」「うん。」「2月さ、パリ一緒に行く？会社の招待にするからちゃんと聞いてって橘君に言われてるんだけど。」「あごあしタダってこと？」「うん。」「すごーい！カンヌ行った時みたい。うん、ちょうど行けるはず。プロモーションもひと息ついてるはずだし、その頃しばらく暇にするつもりなんだ、難航してるCDの売上枚数によるけど。」「分かった、橘君に言っとくよ。」「いつ以来かな一、パリは。学生時代の遊びと仕事と仕事でしょ。この前のレコーディングとプロモーション以来だな。2、3年振りだ。もう2年とか3年は一緒になっちゃう年になっちゃった。アキは初めてなんでしょ？」「うん。」川上は空になった自分の大ぶりのグラスにワインを注いだ後、デキャンタを藤田のグラスのそばに近づけ少しだけ残った杯を空けてしまうことを促した。藤田が上を向いて飲み干している時に、川上は、「あのさ、結婚しよう。」と言った。藤田はびっくりしてグラスを置き、見開いた目で川上の目を見ながら、「なに？」と言った。「さっき言ったみたいに今日暇だからいろいろ考えたんだけどさ、会社が将来パリ行っちゃったらどうするのかとか、今日子はパリでも仕事は出来るのかとか、出来ないんだったら俺は東京で今の会社で働けるのかとかそういうこと。それで、もう結婚しとけばそれはちゃんとした形で2人の問題になるし、まわりの人にもいろいろなことは2人セットの問題なのね、って事前に分かるし、今の人達は分かってくれる人だし、俺の仕事だって、まあひどいものじゃないし。それでこういう結論に達したのだけれど。」

藤田はうつむき、小声で分かったけど、と言った。川上は藤田がびっくりしているのには当然気付いていたが、「それは、僕の話が分かったっていうことじゃなくて、僕達が結婚することが分かったってことでしょ。」と笑顔で言ってみた。藤田は心の中でゆっくり、1、2、3、3.1、と数えた後に、やはりうつむいたままで、うん、と答えた。

東京ではいい店を作れば外国人の方が固定客になりやすいということを、銀行勤務時代の調査データで知っていたため、「j.s.」を、横田は東京に住む外国人達の店にしようと考えた。

(いい音楽を作り出していくこと、大人がくつろげること、料理がおいしいこと、優れたバーテンがいること、店は午後10時半までとそれ以降で分けて考える、2階のレストランは、地下にダンススペースがあり、1階でも時々ライブ演奏を行うことを考えると、普通のフランス料理では客の顔が見えてこない、料理目当てのフランス人なり食通の日本人には、どんなにいいものを出してもこの店には馴染んでくれないだろう、2階のレストランに来る客は、音楽が好きであり、クラシックの素養はあるがそれだけでは満足せず、ある程度年を取っている者でも考え方は若く、若者だったら身の振る舞い方は既に学んでいて壁にかかる自殺したスペイン人の画家の名前を知っている人達だ、そうだとすると、料理人も若い方がいいかもしれない、若くてしっかりとした技術を持っている者、天才肌よりも学ぶ技術に卓越しているもの、日本人が適しているかもしれない、料理を食べに来るだけではなく、音楽を聴き、絵を見て、気が向けば地下でビデオアートを見ながら軽く体を動かしてみてもいいと思っている2階のレストランに来る客には、ソースで様々なニュアンスを出せるフランス料理をベースにした、繊細なオリジナル料理を出す、そして10時のラストオーダーが終わり、デザートを出し終わると、2階の料理人達は仕事を終え家路に着き、1階のダイニングは増員される、1階のカフェのメニューには、主に夜中から増えていく日本人客のために和食も加える、バーテンも研ぎ澄まされた感覚を持つ日本人の若者、店員は英語が出来る頭がいい学生、フランス語が喋れる者も必要だろう、ドイツ人も音楽を聴きにくるかもしれない、しかし、アメリカ人に受け入れられないと店は成功しない、店の雰囲気が入って食事は必ず1階で取るアメリカ人によってこの店は支えられるだろう、賑やかな雰囲気だけでなく静謐さも好み、人種に関わる問題を重要視しない、そういう人々が主な客層であれば、この店にはヨーロッパ人も来るだろう、日本人も来るだろう、音楽、絵画、ビデオアートに触れたいと思い、くつろぐためには、良い料理と、精練な頭脳を持ったデザイナーが生み出した適度な刺激と心地よさが一体となった空間が必要なものなら誰でも来れる、ドレスコードはない、どちらかと言えば控えめな服装の人達も多く集まるからだ、この店にある絵の中で唯一の贋作である、2千万かけて作ったベラスケスの絵を1階のカフェの反対正面に掛ける・・・)

ホーリーが辞める最後の1週間は、いつもより心持ち日本人が多かった。ホーリーはニューヨークで買ってくるネタ音の他に、コンピュータで自分でも音源を作ってそれをミックスする。ピアノやギターを弾きながら歌うこともある。DJは友達と遊びに行っていたクラブで14才からやるようになった。自分の作った音源を店員に聴いてもらったのがきっかけだ。ブースの透明な仕切りのボードに手をかけながら、松原がチリビールを飲んでいる。友人関係を結ぶまでには至らなかったが、松原はホーリーのDJが嫌いではない。クラシカルでパワフルで少しファニーだ、と本人に向かって言ったことがある。松原はホーリーにはミックスの才能だけでなく、音楽の才能があるのだと思っている。ホーリーは編み込んだ焦げ茶色の長髪の上に、ぶかっとした30センチくらいの筒になった、暗めの水色のニットを乗せている。モニターに目をやりながら、ターンテーブルを回しつつまみを調整したりスイッチを入れたりシンセサイザーを弾き、時折ヘッドホンに首を落として手を休め、飲物を飲んだり煙草を吸ったり客やスタッフと話したり挨拶をしたりしている。ホーリーの奥ではビジュアルを作る藤岡がパソコンを叩きながら指示を出し、その後ろで指示通りにスイッチャーが大小12台の画面をそれぞれ切り替えている。

「(あなたの演奏は素晴らしい。なんか自分で作った気になっちゃう。)」

ブースの中でスポーツドリンクを飲んでいるホーリーに、馴染みの30才くらいのアメリカ人女性が声をかけると、ホーリーは笑って、「(本当はそうなのかもね。)」と答えた。藤岡はさっ

きから、フロアで一番大きい、階段横に吊るされている2.5m×4.5mの大画面と、フロアに埋め込まれたセミダブルベッドくらいの大きさのモニターと、席の奥手に置かれた38型のモニターに、昔自分が遊びで作った架空の企業のためのVP素材と、仕事で自分が編集した文化人、学者、政治家の講演風景の映像、それにテレビでやっていた今日の巨人戦の映像を、3つのモニター相互の関連を考えながらアトランダムに繰り返し流している。髪を肩までルーズに伸ばし、一重目蓋の整った顔立ちをしているが、藤岡の今日の洋服はわざと無頓着にしてあって、スーパーで買って来たようないい加減なシャツをブカブカのズボンの上に裾を出して着ている。

「ここにも何か飲物持って来ようか？」と横田が、自分の方から見て手前にいるアシスタントに声をかけると、同じ事をアシスタントが復唱して藤岡に伝えた。

「コークハイ、本物の。」と藤岡は笑いながら頭を振って横田に言うと、横田も笑いながらゆっくり首を振った。絶滅寸前の言葉だと横田は思った。それから、この店も20年前の店のようだよな、と思った。

藤田は駒沢と一緒に、フロアの脇のテーブルに座って川上達が来るのを待っていた。

「橘さんや佐川さんと会うのはすごい久しぶりだな。」「駒子は久しぶりだっけ、ここ来んの。」「うん。」「今日はいつもよりちょっと人が多いよ。ほら、今あそこに映ってるDJがあとちょっとでここ最後なの。だからファンが来てるのよ。日本人も多めよね。」「アメリカ人？」「うん、ソーホーが地元なの。やっぱ地元がいいって、友達もいるし。」

駒沢はふーん、と言ってウイスキーの水割りをひと口飲んだ。いつものように、極薄のジントニックかうオツカトニックを頼もうとした時に、いいブレンドウイスキーなら酔わないわよ、と藤田に言われたので同じものを頼んだのだ。自分でグラスの中の氷をくるくるまわしその様子を眺めながら、藤田は駒沢が喋るのを待っている。

「おもしろい音楽ね。今作っているみたい。」と駒沢が言葉を継ぐと、「その通りね。横田さんがそういうことをやって欲しいみたいなのね。踊るためのものだけでなく、制作現場に立ち会う雰囲気。」と藤田は言った。

ホーリーは藤岡が流している巨人戦の映像から、番組宣伝のためにゲスト出演していた連続ドラマの主演タレントとアナウンサーの掛け合い部分を引っ張り、ビートに乗せ修飾音を付けて取り合えず場内に流している。(・・・dodododonna yayakukugaggarawowowwo,, ,kyoushina, kyokyokyoushina, kyoushiomata omaoamaomat・・・)

そのコメントの音階をキーボードを使い、スティーブ・ライヒよろしくチェロの音でなぞっていく。ホーリーは今、別のアイデアを練っているようだ。3つのモニターの映像が藤岡の作業でキーボードの音と連動した。会社の会議室での会議風景、東大学長の入学式典での挨拶、巨人戦でのタレントとアナウンサーのかけあい、キーボードの音と連動しながら、それぞれ、微妙にずれを作って切り替わっていく。それ以外のモニターは、オペレーション中のホーリーの姿を映し出している。ホーリーは別のキーボードに移った。演奏はオートマチックにされ続けている。ヘッドホンを替え、キーボードを弾き、機材をいじっているがその音はまだ聴衆には聞こえない。2、3分でまたヘッドホンを元のものに戻したその時に、全てのモニターの映像がフリーズした。フロアはドラムビートだけを残して数秒静まり、聴衆は自分達の喋っている声を聞いた。歓声が起こる直前に、スピーカーから管弦楽団の奏でる音が沸き上がり、調性の希薄な主題らしきものを形成した。変化するビートに合わせて20人の楽団が最初のメロディを展開させフーガに仕立てようとしている。最初の展開部までが大音響でリピートされると、そこでビートがブレイクし、テンポが上がった。フルート、ピッコロ、フレンチホルン、トランペット、サクソ、

チューバ、バイオリン、コントラバス、チェロがパートを受け持ち、同時に音を鳴らしながら掛け合いをしている。ギル・エバンス、オーネット・コールマンを連想させる演奏だが、ホーリー自身はもうヘッドホンは外して、近くに置いてある大きなロックグラスでグレープフルーツジュースを飲みながら、腰に手を当ててフロアの様子を映し出しているモニターを見ている。さっきひらめいたメロディがトランペットの音色で演奏されると、フロアで踊り始めた人のうち何人かは確実にそのメロディにはまった。事前に作られていたその曲は、一部分アドリブを加えながら15分程度演奏された。

ホーリーが休憩に入って10分ほどして、川上が橘と佐川と一緒に地下へ降りてきた。横田は彼らがミーティングする時には、ブースの横の、フロアからは幾分陰になった所にテーブルをセットしている。彼らの姿を見て横田は、「仕事は順調？」と3人の中では一番年長の佐川に声をかけた。「ええ、今日は藤田さんと打合せよ、橘のデザインがだいぶ進んできたからね。」と佐川は答え、席に座るとすぐに煙草に火を点けて、天井を向いて煙を吐き出した。「お待たせしました。食事は事務所でみんなで食べてきたから済んでるんです。」と橘が言うと、「いつもの出前の定食だね、僕はチキンカツ。」と川上が言葉を続けた。ホーリーの演奏が中断しているフロアにはクセナキスの音楽が流れ、モニターにはフロアで聴こえる音楽とは全く関係ない、中国から客演の指揮者を迎えた日本のオーケストラの演奏風景と、外でカメラクルーが今撮影している、「j.s.」のビルが映っている。ビルの映像は隣の空地から下から見上げるように撮っていて、ゆっくりカメラのフレームが動くと、大きく広げた3階と4階の窓からオレンジ色の明かりが洩れている様子や、15メートル程離れている民家との間を隔てる、回収したペットボトルを溶かし化学塗料を混ぜ合わせた合成素材で出来た人口竹林が見える。外のカメラは2台出ているようで時々映像が切り替わる。車で来る者は、「j.s.」から歩いて5分ぐらいの所に横田が所有するマンションの駐車場に置いてから来るので、店の辺りはいつも静かだ。

藤田が駒沢を連れて、「来るまでに酔っ払わないように気をつけてたけど、少し飲んじやったね。」と機嫌よさそうに喋りながら、自分達が今までいた席からやって来た。川上は藤田に「あれ、どこいたの？」と聞くと、「あそこ」と藤田は今まで2人で座っていた壁際のテーブルを指差した。丸首のセーターを着た店員が、駒沢の座る椅子を裏手から持ってきた。駒沢は礼を言って席に着こうとした時に、さっきまでいた席にまだ飲物が入った自分達のグラスを忘れてきたことに気づき、取りに戻ろうとして腰を浮かせかけたが、横田に、「大丈夫ですよ、取ってきますから。」と言われたので、「ありがとう。」と答えながらようやく腰を下ろした。

橘は、「さあ、藤田さんは僕が喋り終わるまで起きてられるかな？」と言った。

「え？そこまで酔ってるように見える？さっきちょっと踊っちゃったからかな？」と藤田は駒沢に尋ね、駒沢は、「あたしが代わりに聞いときましようか？」と明るく応じた。

「さっきまですごい演奏してたんだよ、ホーリー。あっち行っちゃっても聴きに行こう。」「そんなすごかったんだ？」と佐川が口を挟む。「うん、ジャズっぽかった。」と藤田は言った。「水もらおう、水。頭冷やして仕事しよう。みんなはお酒飲んで、私は水。」

全員の飲物がテーブルに運ばれると、橘は早速、藤田に向かって話し始めた。

「いつも考えていることで確認になるんだけど、異邦人のための服です。同じことを考えているデザイナーは昔も今もたくさんいると思うけど、要はカッコいいということです。けれどデザインにあからさまなモチーフを求めてはいません。既存の生地はもちろんだけれど、擦り合わされた感じや滑らかな感じを出すために、新しく素材開発されたものも使います。今自分が考える最も美しいシルエットを持つワンピース、少しだけ奇妙に浮き立つシャツとスカートの組合せ、ジャケットとパンツ、ウール、ファー、皮、合成素材を使った20数点のコート、抑制の効いた色

彩パターンが主役で、冒険的な色彩シリーズをひとつだけそれに加えます。ヘアもメイクも極端な話、僕達がうまく作れたら何でもいいと思ってます。完全に向こうのスタッフに任せるつもりです。サイズは全体に去年より少しルーズかな。来週にはいくつか試作品が形になって来るんで、もっと藤田さんに伝わると思うんだけど、ま、とにかくカッコいい、そういう服を作ろうとしています。形容詞で言うならカッコいい。よその国で、あるいは自国にいるのに異邦人であると感じながら生活する人のための服、友情という感情はセッションに求め、自分の居場所は自分の才覚によって確保し、風向きが変わればまたどこかへ移っていく人のための服、8割のハレと2割のケ、芸術性を伴った突出、驚嘆に付いてくる激賞、みたいなものは僕の狙えるところではないし、主役はやっぱり繊細で鋭利で、あらゆるニュアンスの源泉となるカット、パターンです。仕掛けのある演出は特に考えていません。会場のレストランに立っている太くて四角い柱の間を、モデルが斜めにウオーキングします。柱には横田さんからお借りすることになっているウィリアム・ブレイクの挿絵を飾って、ウオーキングスペースの先には、ジャクソン・ポロックの絵を2点セットします。バイヤーやジャーナリストに座ってもらう椅子は、昔父がスウェーデンの家具メーカーのためにデザインしたものを2、3種類、また日本の工場で作ってもらうことになっています。だいたいこんな感じです。だから演出は、音楽くらいかな。」

話を聞いている間に飲み干したグラスに水を注いでもらった藤田は、またひと口、ふた口飲んでから、「ファッションショーのための音楽、ファッションショーのために作られた音楽、このファッションショーにふさわしい音楽。」と言った。川上が、「はあ。」と言うと、「とにかくそれ用に新しいもの作りたくなかったけど、同時にクラシックを巨匠と呼ばれている人の演奏でかけたくなるのよね、そういうこと言われると。新しく作るものに何か意味があるとしたら、」と言ってから、藤田はふうと一回肩で息をして、「私自身が現在について、どう感じているかを知ることよね。」と言った。佐川は、「私もそう思う。」と言ってから、ドライ・マティーニをひと口飲んだ。

12時半を過ぎるとホーリーの2回目の演奏に備えて地下のフロアに人が増えてきた。店員達はDJブースの奥に積んである机と椅子をフロアのスペースに出していき、ある程度の人数が座れるようにセットした。バーカウンターの近くには立ち飲み出来るように、肘がつけるくらいの高さのテーブルを出して、人々がたむろ出来るようにしている。疲れた者は1階に上がってソファに座りながら、通常ステージが組まれる正面に降ろしたスクリーンでホーリーの演奏が見られるよう準備されている。

「ナイスゴール。」と、横田はガールフレンドと一緒に来ていた梅田に声をかけた。出版社の編集者と一緒に来て以来、梅田は月に1、2度、次の日に練習がない時に顔を見せるようになり、横田がサッカー好きということもあって顔見知りになった。

「フレンドシップマッチだからオフィシャルの記録には残らないんだけどね。」と梅田が答えて赤ワインをひと口舐めた。「けどキーパーと1対1の時にあれだけ好きにやれると気持ちいいでしょ。」「そりゃね。絵にもなるしね。」実際、左へ軽くフェイントを入れると同時に左足のつま先にボールをぶつけて浮かせ、なぶるように右足のアウトサイドでサイドネットに決めたゴールシーンはその夜のスポーツニュースで何度も放送された。コートを預け、臙脂色のジャケットも脱いで手にもっている梅田は袖が短めの白いティーシャツを着ており、左腕からは十字架に架けられたキリストのタトゥの足の部分と、その下に英語で書かれた、「一粒の麦の死」という文字が見えている。ガールフレンドは茶色のカウスキンのミニスカートに、襟が高く先を長く仕立ててあるピタツとした白いシャツと、襟と腕の一部分にスカートと同じ皮を使ったジャケットを合わせている。長い髪はパーマがかけられうねっていて、薄いブルーのサングラスをかけて

いる。身長は190センチ弱ある梅田は短髪を立たせていて、顔は日に焼けている。

「ホーリーの今日の1回目はどうだった？」と梅田は横田に聞いた。「ちょっと酔っ払った藤田さんはシビレてたよ。」「藤田さん今日いるの？」「川上さんとかと打合せしてるよ。」「またショーの音楽やるんだ。」「今度はフランスだよ。川上さんが働いてる所の、橘さんて知ってるんだっけ？」「そりゃ名前は。けど、見かけたこともあるかもしれない。」「そう、そこが今度パリコレに参加することになったんだ。」「ふーん、すごいね。大変だね。」「そちらお預かりしましょうか、と尋ねた店員にジャケットを渡しなが、隣のガールフレンドに、今日はすごい込んで、と言った。それから彼女に疲れてないか聞いた。彼女は、今は大丈夫、頭はここで聴きましょ、と答えた。

「お店、繁盛してるね。」「おかげさまでね。今度一部改修しようと思うんだ。」「へえ、どこ？」「2階の内装と、あと地下に降りるための階段をもう一箇所作ろうと思うんだ。それにこのフロアのモニターも一部変える。」「ふーん。」「手入れてないと飽きるからね、飽きたら終わりだし。」「忙しくなるね。」「適度にね。」「横田が、じゃ後で、と手を振ってキッチンに下がるとガールフレンドは小さいモニターの横に空いた席を見つけて、こっちこっちと言いながら、梅田を引っ張っていき、彼らが腰を落ち着けるとすぐにホーリーの2回目の演奏が始まった。

午前3時にホーリーが帰り、その後で藤田や松原も家路に着いて、3階のVIP用のバーにいた最後の客が出て行った後に、横田は1人、4階の自分の部屋でパソコンの画面を見つめていた。下の階では当番のアルバイトが何人かでフロアを整備し、キッチンでは見習が2人、今日の夜に備えて掃除をしている。ヨハン・クルセンからの返信メールに、「(それでOKだ。前にも伝えたように僕からのリクエストは、開店の時からするとちょっと飽きが来た2階の内装と、1階と地下への行き来がしやすくなるように階段を付けてくれれば、予算の範囲内で後はまかせるよ。ジェイのスケジュールが分かったから飛行機と宿泊の手配はこっちで全てアレンジしておく。空港に着いたら君が食べたいものを食べに食事に行こう。明日か明後日、電話の繋がる時間を教えて欲しい、電話するから。)」と答えた後に、インターネットでメインバンクのサイトにアクセスして円相場を眺め、10分考えた後に50万ドルを円にシフトさせた。それから机に両足を乗せて、投資顧問会社が1ヶ月ごとに発表している、ニューヨークの地域別の地価をチェックした。



「藤田さんの大学って私が考えていたのよりずっと小さいんですね。」

「普通の大学が大きすぎるのよ。ここだって1年から4年までで1000人はいるのよ。そのうち音楽を仕事に出来るのはねー、ピアノの先生と学校の先生と、大学に残る人を除けば、一学年にそうね、10人から20人くらいじゃないかな。そのうち演奏家になるのがせいぜい3人くらいで、あとはホントいろいろ。企業が経営するコンサートホールや音楽関係のエージェントのプロモーターみたいな人もいれば、カラオケ用のアレンジャーみたいなものをやりながら、作曲して指揮者やオーケストラの事務所に作品を持ち込んでる人もいるし、レコード会社やBSやCSのテレビ局に入社してクラシックの担当になってる人もいるし。」

「人と違う音楽の先生になることって出来ないのかな？」

「それってどういうこと？」

「音楽をちゃんと学んだ人って普通の人より音楽の秘密っていうか、成立ちを知ってる訳でしょ。主に和音やいろいろな旋律のことになると思うけどそれを教えるの。長調と単調の違いは何が作っているのか、和音の響きの違いは何が作っているのか、世界のいろいろな国や地域にある旋律や特徴的なメロディのこと、そういうことを知っているって普通の人ももっと音楽を楽しめるし、作曲だって出来るようになる。この前、藤田さんが私に教えてくれたようなこと。」

「あれはみんな習うんだけどね。教え方が下手なのよ、みんな。」

西門を出て住宅地に入ってすぐの所にあるカフェの2階で、洋梨のタルトとチョコレートムースを食べながら、駒沢は曇り空の下に見える家々の屋根や、向こうの通りの奥に見える籠付きの古い自転車や、テニスコートを囲んでいるらしい木々を見ていた。藤田はモンブランをひと口食べた後エスプレッソをすすって、「教えたいと思ってないみたいだし。」と付け加えた。

「2年間の一般過程が終わると、学校が作曲科の生徒達に教えることはほとんどなくなっちゃうのよ。あとは何人かの先生について作曲したり、美学の講義を受けたり。先生も作曲家だけ作品が演奏されることはほとんどないし、40代とかまだ若い先生はコンクールに応募してる人もいたけど、入選してもどうということもないの。2、3回ホールで演奏されて、ちょっとお金くれて、どこに置いてあるのか分からないけど入選作の楽譜が出版されておしまい。海外に留学出来る副賞が付いてる外国のコンクールもあるけど本気で頑張ってるのは若い講師の中の2、3人じゃないかな、生徒の方がモチベーション高いかも、一般に。」

「じゃ学校行ってもあまり教えてもらうことはないんですね。」

「そう、だから私はあまり行かなかった。芸術ほど偏狭なものはないからね、入った教室も合わなかったのよ。」

駒沢は相槌を打って、チョコレートムースをもうひと口食べた。取り立てて美味しいわけではないが、藤田の皿も駒沢の皿も量は多めだ。2階には他の客はいない。女性の店員が1人、奥のカウンターの中でインストゥルメンタルで流れるビートルズの曲を聴いている。

駒沢は、「大学に友達いたの？」と自分にとっては重要な質問を思い切ってしてみた。

「まあ、一般過程で授業が一緒の人とか、作曲の教室で一緒だった人とは遊び行ったりしてたけど。今はほとんどどうしてるか知らない。仕事が増えるに従ってどんどん学校行かなくなつたし。」

大学の話をしていると藤田は久しぶりに煙草を吸いたくなつた。高校2年の時から吸っていたが、仕事が忙しくなってきた大学にほとんど行かなくなると、自然と止められた。藤田はまたエスプレッソを口に含んで舌と鼻腔でよく味わった。

「私と似てるね、前にも言ったかもしれないけど。」

「うん、似てる。」と、藤田は答えた。

午前中に駒沢が通う大学まで車で一緒に行き、今度の春に駒沢が申し込もうとしている国際部の授業を見学した。駒沢は講義をしている教師の言葉に集中して耳を傾けていたがほとんど聞き取れなかった。言葉の切れ目切れ目で、「今だいたいどういうこと話してるの?」と藤田に聞き、その度に「ヤルタ会談でのルーズベルトの体調。」とか、「東欧諸国についてのチャーチルとスターリンの取引。」などと藤田は答えた。40分程講義があった後にディスカッションが始まった。アメリカ、ドイツ、イギリス、サウジアラビア、オーストラリア、ニュージーランド、中国、韓国、香港から来た17人の学生達は、自分達の順番が回ってくると、アメリカ人教師が持つインターネット上のコミュニティページでレポートを提出することになっており、それに対して意見がある者はそのコミュニティページ上で事前にレポートで意見表明しなければいけないことになっている。学生達の議論の進め方にあいまいな部分があったり、明らかな誤解があった場合には、Eメールを通じて教師からアドバイスされ訂正されることもある。授業当日はレポート提出者への質疑応答がされた後、少し教師が喋り、またそれに対して学生達から意見交換がされて、最後にレポート提出者に拍手があって終わる。藤田が、「こりゃ大変だね。」と呟くと、「最低英語が話せて書いて、ヨーロッパとアメリカの歴史のベーシックな部分が分かってないと入っていけないわね。」と駒沢も同意した。けれど頭の中では、自分の能力に照らして勉強すればなんとかなると思っているのか、がっかりした様子も切羽詰った様子も見せずに、「あと半年近くあるからお金と時間使ってなんとかしたいな。いちおう、第一希望はここにしようかな。」ともう決めた風に話した。駒沢は、話すことはほとんど分からなかったようだが、まだ40才くらいに見える、頭が少し薄くなったアメリカ人教師の授業中の態度が気に入った様子だった。授業が終わると、「ソー・ロング、ミスター“コンダクター”アダレイ」自分の頭の中でそういった後、教師とも学生とも会話をせずに藤田を連れてすぐに教室を後にして、「もしよければ藤田さんの通った大学を見てみたいな。」と言ったのだった。

藤田の通った大学の中庭をぶらぶら歩き、音響処理を施された講堂を覗いた後2人でケーキを食べている時に、駒沢が「建物の中に入って誰かの演奏を聴いてみたい。」と言ったので、昔藤田が練習していたピアノの練習室に行ってみることにした。駒沢が美人なので、課題や演奏会の準備などで忙しくなくて、それほど神経質でもない男の子が演奏しているのだったら聴かせてもらえるかもしれない、そう思って練習室に来てみたが中には誰もいなかった。ちょっとした間2人は入口に立ってどうしようか決めかねていたが、「懐かしくて入っちゃいました、っていう事で藤田さんがピアノを弾くのはどうでしょう?」と駒沢が冗談めかした調子で、愛想よく笑いながら藤田に聞くと、藤田は、「ピアニスト志望だった17才に戻るか。」と答えた。駒沢が、「おじゃましまあす。」と言いながらグランドピアノと椅子だけが置いてある7、8畳程の部屋に先に入って、鍵盤を蓋っているカバーを開けて、鍵盤の上に埃を避けるためにかけているフェルト地の敷布を取った。自分で椅子の高さを調節した後に藤田はピアノの前に腰掛け、コホンと咳払いをした後にすぐ横に立った駒沢の目を見てニコッと笑った。さっき2人でカフェの2階にいる時に流れていたビートルズのエリナー・リグビーがピアノの音で聞こえてきた。中学生の時に読んだ村上春樹の「ノルウェイの森」にこんなシーンがあったような気がする、駒沢はそう思いながら、鍵盤の上を自由に行き来する藤田の手元を眺めていた。16小節ということだけ先に頭の中で決めていたアドリブを通り、もう一度頭から繰り返し、

「おーざろんりぴーぼ、うゑあどうぜおーかむろむ、おーざろんりぴーぼ、うゑあどうぜおびろー。」と、最後だけ小声で歌詞を歌って藤田が弾き終え、駒沢は拍手をした。拍手をしながらぼろっと涙をこぼした。

駒沢は今までこの曲の歌詞の意味を知らなかった。この前、舞台の稽古をしている時に出会っ

た嫌な中年の女優のことを思い出した。自分は自分の人生を生きようと思った。拍手を終えた後に駒沢は涙を指先で拭いながら、「藤田さんの曲を聴くと涙もろくなる。」と言って照れ笑いをした。何か喋りたそうに見えたので、藤田は駒沢が喋り出すのを待っていた。数秒沈黙が流れた後に、

「藤田さんは19才の頃には何になりたかったの？」と駒沢が尋ねた。

「何にもなりたくなかった。」

そう答えてから、ひと息付いた後、藤田は即興で編曲したサージェント・ペパーズのイントロを優しく弾きながら、

「今は、下手でも許してくれる場所でピアニストをやりたい。」と言った。

品川にある橘のオフィスから電車を乗り継いで自由が丘駅でおり、コンビニでチョコレートとミネラルウォーターを買ってから、藤田はスタジオのソファによく腰を落着けることが出来た。その日橘はスーツとワンピースと数点のコートを見せてくれた。

「私は洋服について感想を述べるための専門的な言葉は持っていないけれど、プロペラを回す時の最初の力はすごく感じるわよね。」

「その通り。僕はそれを初期出力と呼んでいます。デザインする上で最も重要なものです。」  
シルエットや基本的な色使いはどれもとてもシックだったが、カーキや薄めの黒や臙脂などのベースの色に、衿や裾や背中の一部、ものによっては体全体を浸食するように、スモーキーピンクやスモーキーグリーン、所々が錆びた鉄のように光る新素材、淡い水色の細かいドット、アフリカかどこかの国の国旗にあるような原色でのパターンなどが、ある時は苔が生えたように、またある時はベースの色を切断するように覆っている。微妙なニュアンスが出るように染色した所に、刺繍をしてあることもある。切断線を強調するように一部地肌が見えるようにしてあるものもある。コートは綺麗なドレープが出るようにきっちり造型が考えられたウールのロングコートと、一見シンプルでシックに見える皮のコートを見せてもらった。膝丈の茶色の牛革のコートは素材が硬いまま作られていて、身に付けてくれた佐川の体からどの部分も数ミリ浮いているように見えた。

「洋服のデザインは一般に政治的なものです。目に見えない雰囲気を感じて見える形にするのだから。」

藤田はひと口サイズに包んであるチョコレートの包み紙をむきながら橘の言葉を思い出した。

「けれどそういうことだけを考えていると、僕は服を作る興味を無くしてしまうんです。2ヶ月前に、60年代半ばの新宿伊勢丹の、婦人服売場の様子を映した映像を、放送大学の講義のための素材として放送してました。ほんの何秒かの映像だったけど、吊るしてある服の1点1点が、今のそこらのブティックにかかっているものより力があるように見えました。だから、」橘は牛革のコートを着た佐川の右肘を曲げたり伸ばしたりして、そこに自然な折れ線を作ろうとしながら、

「僕は今度横田さんをお願いして絵をお借りしようと思ったんです。何世紀も前の本の挿絵と50年前の絵と。これらの絵については現代人の中で理解しないものはもう1人もいない。」こう続けた。

「だけどあとはだんだん理解されなくなる。作品が意味を持たなくなる、そのうち海の青さにも、僕達の大半が心を動かされなくなる、色や形が分からなくなる。」橘は混乱しているように見えた。

「矢印がいろいろな方向を指しているだけなんです、今は。あるのは関係性だけ。それを見えるようにするだけではつまらない、僕がやりたいのはノウハウの創造なんです。」

橘はそこまで喋ると大きく深呼吸して佐川の右腕から両手を離れた。藤田はとにかく励まそうと思って橘の肩に手を置き、「うまくいってると思うよ。」と言った。橘は目をつぶって、もう一度深く息を吸って吐いてから、「ありがとうございます、よろしくお願いします。」と笑顔を見せながら言った。「頑張ってるわ。」と藤田は答えた。

チョコレートを3つ食べ、ミネラルウォーターをボトルの半分飲んでから、藤田はベートーベンの二短調のソナタの第3楽章を弾いた。弾き終わるとこの曲を初めて弾いていた10才の夏休みに聞いた、アブラゼミの鳴声を思い出した。1曲だけ弾いた後はしばらくソファにもたれ掛かってフランスのファッション雑誌を眺めていた。外は晴れている。もう少し経つとまた夕方になるだろう。台の上の五線譜とシャーペンと消しゴムを手にとって、また背もたれに寄りかかって

楽な姿勢を作ってから、藤田はモチーフとなる音の断片を幾つか作り始めた。

広尾のマンションに帰ってまずメールをチェックした藤田は、幾つかの新着メールの中に横田のものを見つけた。

改修工事の日程が決まりました。2 / 1 ~ 2 / 2 0 です。

ヨハン・クルセンは来週の土曜日に来日します。

もしよかったら一緒に食事でもしましょう。 横田

工事の日程の後半は、藤田や川上達がパリにいる時と重なっている。彼らがパリから帰ってくると、この前、横田が説明してくれたように2階の内装が変わり、地下に降りる階段がもう1ヶ所出来ているはずだ。地下のフロアの階段の脇にある一番大きいモニターは、最新のデジタルハイビジョン技術を取り込んだものになり、テーブルと椅子は全て新しいデザインのものに取り替えられることになっている。

お誘いありがとうございます。ぜひ食事、ご一緒させて下さい。

この前、ミスター・ヨハン・クルセンが来日した時は、

お話する時間が合わなかったので、今回はとても楽しみです。

その時には、「K a z u s h i T a c h i b a n a」のショーのための音楽も幾つか出来ていると思うので、

橘君たちと一緒に聴いて頂いて、感想を伺ってみたいです。 藤田

藤田は自室に置いてあるPCとキーボードに向かってまた曲を作り始めた。キーボードを操作する手を止めた時にふと横田のことを考えた。横田は今頃4階の事務室にいて、よそに所有する不動産の税務上の資料に目を通したり、ニューヨークの友人に電子メールを送ったりしているのかもしれない。藤田の頭の中に今浮かんだ長身の横田は、細身のダークスーツを着て滑らかに動きながらも、どこか深い所でとても傷ついているように見えた。辺りがすっかり暗くなっていることによりやく気付く、横田はベランダの外に出て人口竹林の向こうに見える住宅街の明かりと、まばらに見える星と三日月を眺め、微かに聞こえる高速道路の高架を走る車の音に耳を澄ましている。藤田は一瞬、これから夜が始まるのか、夜明け前なのか分からなくなった。しばらく考えごとをした後に、再びコンピュータのキーを操作しながら、川上はもう事務所を出た頃だろうと思った。このマンションに帰ってきた後に、2人でレストランに行くことにしているのだ。そして互いの話を、声を聞きながら、顔を仕草を眺めながら食事をする。その場では私達2人は世界から切り離されていて、別世界の給仕人の手でサービスをされている、と藤田は想像した。

了